

# 〔I〕 教 育 課 程 の 研 究

鈴木洋一郎 中野満男 水越 醸  
高森 充 倉田有邦 酒井為久  
小幡正躬 阿部健一

## I 後期中等教育の改造を目ざす教育課程の問題点

——問題点の検討と在り方への私案——

鈴木洋一郎

現在の所謂「科学革命」とか「技術革新とか」あるいは知識爆発の時代の中に教育課程の改造が急速に世界的規模のもとに進められている。そして国民に高度の学力が要請されながらまた教育の機会均等の増大から、後期中等教育を義務教育化しようとする提案もなされている。中卒の90%を収容している高校においては当然現行の教育課程は消化しえないという現象をひきおこしている。これは全国高校長協会の報告をまつまでもなく諸教科の内容を理解できるものはトップクラスの10%や知能分布のトップ1/3などくらいで、これら少数のエリートのみを援助しているという批判である。

また教育課程の改造を促進したのは、このような外的の批判・要因の外に「教科を教えるのではなく生徒自体を教えるのだ」という従来の経験主義のカリキュラムの欠陥が指摘されまたそれを克服しようとする意図があった。このような内外の要因から「理論で武装された人間」の育成をしようとする知識中心の現代的教育課程へと改革発展した。そうして知識構造の重視の観点に立って現行の中等教育一特に後期中等教育の教育課程の実態を考察し、その問題点を検討してみよう。

### 1. 今までの研究概要

教育課程は学習指導要領にも述べられているように、経営体である学校が自主的に編成するもので、一般的には教育目標を達成するための教科を中心とした指導計画であると言われ、その計画の実施と評価により管理されているものである。従って学校によりその編成に多様性があるのは当然であり、多くの問題点が残されている。本校においても嘗て「学校紀要」第12集の中でこれらの問題点の所在を発見すべく多くの項目を想定して、産業界（経営者）や学界・現場の教師

にアンケートを求めその結果を発表した。その項目は大体次のようなものであった。

1. 高校の義務教育化
2. 大学の増設
3. 入試制度
4. 必須制か選択か
5. 文理科などのコース制

これらの調査からわかったことは、産業界、学界は既して一般的な教養を身につけることを期待し現状の維持または改善を漸進的に主張しながらもまたハイタレントを要望する能力主義重視の考えであり、これに対し現場の教師の間には適性能力を重視して画一的教育に反対の空気があった。ただアンケートは教科の方面に限られ人間形成に重きをおく特別活動などに対する項目は後日に残すことにした。

### 2. 教育課程の諸問題

前述の1～5の問題点は現在も継続的に検討されているが、これらを再度とりあげる前に、現行の6・3制の教育課程を高校に焦点をおいて巨視的に展望して、その編制について私見を述べたい。

現在、義務教育就学年令の繰り下げ、小学校の課程を前期・後期に分けること、高校進学率の上昇による義務教育年限の延長、更に高校3か年制の長短や大学教養部の在り方など多くの問題が論ぜられている。この中から二、三とりあげてみると、まず

1. 高校の準義務教育はどう考えるべきか……

高校への進学率急昇や知識爆発、技術革新の新時代に対応するためには、義務教育の充実か年限の延長かが求められ高校の義務教育化は時間の問題であり早急に教育課程の在り方を考える段階に来ている。

2. 中学と高校の教科内容の格差をどのようにすべきか……

中学から進学者の多数を占める高校普通科の教科内容は中学のそれに比べて内容の難さに飛躍があるために、入学直後から生徒は学習方法もわからず調子をくずすものが多い。補習や能力別クラス編成更にコース制の採用など、説明や学習進度などを考えながら授業を行なっても、現行では教育目標を達成するには道けわしい感じがある。これにどのように対処すべきか。

### 3. 高校の教育年限は3年でよいか……

学力の多層化現象のある高校生に対し、大学進学準備や就職決定の3年を除いた2か年の高校生活は人間形成の上からは短期間であろう。現代の高校紛争の一として予備校化などの受験体制からの解放が挙げられるが、これらは現教育課程の矛盾を痛烈に述べていると考えられる。

### 4. 大学教養部のカリキュラムの問題

最近の大学紛争の反省として教養部の在り方が指摘され、改革委員会を設けてその試案を内定する傾向がある。教養部の学生は大いに不満をもっている（教養部2年は高校の焼直しであり新鮮味ない。教授は教育よりも研究に専念することが多く、例えば工進にシェクスピヤの講義や医進に中世の歌謡などは意味がないというのである。）しかし現に改革への試みは進行中であるから詳しく私案は述べず、ただ高校との関連において考えられる点を挙げるにとどめたい。

以上の実態把握の上から次のような試案を問題として提起するならば、

1. 義務教育の1年延長（中学4年制）
2. 高校教育の充実（前後期各2年）
3. 大学専門課程の充実（3年）

中学校は従来の高校1年的な教材を加えた4年制にし高校進学への格差をなくし、大学進学課程となる4年制高校では前期・後期とに分け特に後期への進学をきびしく、別に職業課程は2年制とし、中学4年の進学指導を徹底して行なうようにする。大学専門課程の3年制は2年制からの反省であることは勿論である。これらは教養部の解体と高校教育の充実とからの提案で冒険的なところみではあるが批判を受ければ幸いである。

以上のような編制への理想像をもって現在の後期中等教育の教育課程を展望し、諸問題を指摘してみた。

## 1. 教科内容の検討

各教科の教育目標は学習指導要領の中に理想として掲げられているが、それぞれの教科の内容において実現されているか。大学受験を前にして歪曲され、不必要なものは省略しまた進度を速めるなどをし、また目

的のため重点的に指導することになり、また義務教育化という教育の普遍化とか現代化とかが問題にされる一方、新時代の要請に対応する教科内容の高度化の観点からその検討が急務となっている。

## 2. 適性能力に配慮

旧制中等学校と違い準義務教育的な高校においては、嘗ての小学校のように多様な適性と多層の能力とをもつ生徒を入学させている。大学区制の高校の場合は入学の時にのみ学力の格差は少ないようであるが、多数の学校は学力の多層化をいかに指導しまた適性の多層化をいかに発見し伸ばしうるかを考えている。コース別・能力別と校内で小グループを編成して指導を試みているが、その成果の発表や研究の継続は少なく寧ろ指導上問題を残している。生徒の学力の実態を把握せず、本人の希望や科目の好悪などからのコースの決定やテスト成績による能力別な便宜的な方法は、教科においてもHR指導においても十分の効果は期し難いものである。これらの観点からカリキュラム編成上配慮すべき点を指摘するならば、まず

### (1) 科目選択制か、必修制か

最初選択科目を多くとり入れたカリキュラムが次第に必修科目を増加し、生徒にその適性能力に合う科目選択の自由を与えないようになってきている。高校前半は別として後半においては選択制を採用することは是非必要であると思う。

### (2) B類型の画一履習か、コース制か

調査によれば、実業界、学者は現場の教師と比べて画一履習（同じコースで全員履習）を望むものが多いが、少くとも高校教育の前半においては、これらの声には耳を傾ける必要がある。また大学や社会の要請に応じて理数科コースの高校カリキュラムの試案についても検討する段階に来ていると思う。

### (3) クラス編成は能力別か、等質か

クラス編成は教え易いという指導本位からでなく、学習しやすいという生徒本位にたつてなされるべきである。確かに能力別の授業は難易の焦点がわかるから教えやすくまた学びやすい一面をもっている。しかし問題はどのような方法順序によって、そして基準に従って編成をしたかという点である。生徒の実力・適性を十分理解せずに一方的に編成した結果を強制することは、優越感や劣等感を生徒間に醸成させ人間形成の過程においてその後拭いきれない傷を残すことになることを忘れることはできない。等質のクラス編成にはその生徒数や施設面にも若干の問題はあるが、教師自身の真摯な教材研究や計画的な指導法とか正確で継続的な評価の集積とその活用や反省の上になつてカリキュラムが進められるならば新しい道は開けるものと確信する。

以上3つの問題点は本校の現教育課程に対する批判と意見であるが、更に教科それぞれの内容について反省をし検討してみる。

### 3. 教科の検討

現行の教科内容はたびたび改訂された歴史をもってはいるが、その教科は長く変化がなかった。こうした既成の分類を肯定する前に、現時に即応した教育目標から教科の再編成、再検討はあるのではないかと思う。例えば

1. 「国語」の文学的なものと「芸術」との関係  
芸術の一分野としての「鑑賞」と「創作」の指導はいかにあるべきかということである。
2. 「地理」と「地学」  
理学部の一としての地理学と地学とは共通な基盤があるので、二者の総合的な科目は考えられないかということである。
3. 「歴史」学の独立  
政治、文化、経済学などの外に科学史や文学史または国語（ことば）史などを総合し、歴史の原理を学ぶような科目の独立はないだろうか。
4. 「生物」と保健  
保健は生物としての人間を知ることから出発

するのであるから、当然発展的に一科目にまとめられはしないだろうか。

### 5. 芸術（文学を含む）体育と特活（クラブ活動）

芸術・体育の同好的な傾向を特活を拡大し重視することによりその中への位置づけを考えられないだろうか。そして特別活動の意義を更に強調しその在り方について改めて考えなおす時期に来ている。この特活についての提案は第2報告においてしたいと思う。

## 3. あとがき

この報告は教育課程の中で特に教科(カリキュラム)について論じて来たが、その教科と同等の位置をしめる特別活動の意義について述べる余裕はなかった。これら特活がまた本校の中高6か年の教育課程編成の中で人間形成についてどのような価値をもっているか、を生徒の実態の調査の上にならば追求してみたいと思う。また、教育課程の管理の問題についても触れ、その立案の責任性や計画実施特に評価の点をも研究してゆきたく考えている。この報告においても単に私見の提案にとどめ大方の批判を得て更に学ぶところあるのを期待するものである。